
Project Beauty Plus

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Project Beauty Plus

【Nコード】

N2370W

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

「Project Beauty」(N4628R)のオマケ集。番外編と後日譚をこちらに掲載します。よかつたら本編読了後にどうぞ。

マーサー in Junior High School

演劇部の部室はざわざわしていた。

なにせ、人数が多い。8割が男子という演劇部としては異例の比率で集まった入部希望者のおかげで室内の気温は急上昇中だ。

そしてその視線のほとんどが、前方に立つ1人に向けられている。

「なんだなんだ。随分集まっちゃったなあ」

可愛い顔の副部長がそう呟いて、隣に立つ四角い顔の部長に視線を向ける。

「ホントだね。こんなに男子ばかり」

「僕は嬉しいよ！こんなに俳優志望が集まるなんて、奇跡みたいだ！」

「どうせまた減るぜ！」

喜ぶ祐午に良彦が思いつきり水を差す。

そんな3年生の隣で、2年生たちは固まってひそひそとしていた。

「あの子だよ」

「ウソでしょ？」

「ホントだって」

そしてとうとう、顧問の先生が現れて生徒の集団の前に立った。

ざわめきがようやく収まって、集まった1年生たちが座るように指示される。

「演劇部へようこそ。じゃあ早速、入部届けを出してもらおうかな」
端の方から順番に列を作らせ、名前を書いた紙を受け取り、華恋は部長の欄にサインをしていった。隣の辻出教諭に渡し、その横では良彦が控えてかわりにはんこを次々に押していく。

その作業がようやく終わって、今度は自己紹介の時間が始まる。

まずは辻出教諭が天使モードで挨拶し、華恋が続いた。良彦の明

るい声、祐午のよく通る声が続き、2年生たちもようやくできる先輩ぶった挨拶に少し照れくさそうな笑顔を見せていった。

「じゃあ1年生、端から順番に行こうか」

華恋が声をかけ、集まった新入生たちが1人1人立ち上がって、名乗っていく。

そしてど真ん中の少女の順番が来た。

彼女だけは立ち上がったただけではなく、全員によく見えるよう勝手に前方に立ち、校則違反丸出しの自慢の縦ロールの髪をふわっと揺らした拳匂ついでにくるんとまわってからこう自己紹介をした。

「美女井 正子です！ あだ名はマーサです。皆さん気軽に、マーサ、って呼んで下さいね」

集まった男子生徒の中からハートがフワフワつと飛び出してくる。

「祐午君とお芝居するために入部しました！ 演劇部に入るって、2年も前から決めていました！ 頑張って主演女優になります！

よろしく願いますっ！」

最後にてへつと顔を斜めに可愛くかしげて、ようやく正子の挨拶が終わった。

部長の顔は渋く、副部長は必死で笑いをこらえている。

「やる気があって嬉しいわ！」

顧問の先生は優しい笑顔でやる気満々の少女を歓迎し、全体的にちよつとテンションのあがった教室では、アピールをプラスした自己紹介が続いた。

「何か質問がある人はいるかな？」

全員の挨拶が終わわり、華恋が立ち上がってこう聞いた。すると1年生の男子が1人、手を挙げている。

「えーと、大山くんだけ？」

「はい」

大山君は狭いスペースで縮こまった姿勢のまま、部長にこう質問した。

「すいません。部長さんのお名前、もう1度教えてもらっていいですか？」

「？」

「美女井 華恋だよ！ 大山君」

質問の意図を量りかねている華恋にかわって、良彦が明るい声でさっさと答える。

「あの、じゃあ、そのマーサちゃんと同じ苗字みたいなんですけど」

たとえば、鈴木とか佐藤とか田中とか高橋だったらいちいちこんな確認はなかったはずだ。

久々に父を恨みたい気分になりながら、華恋はぶふおおっと大きなため息をつき、ちよっと眉間にしわをよせてしかたなく答えた。

「そうだね。珍しい苗字だから、そう考えて当然。ついでに顔が全然似てないから、疑問に思って当然だね。ま、どう考えてもそのうちわかることだろうから先に言っておくよ。私はそのマーサちゃんの姉です」

演劇部の部室を、絶妙な沈黙が包む。華恋の横では良彦が腹を抱えてぶるぶると震えていて、それをドンと肘で突いて部長は諦めた顔でこっぴど吐き出した。

「どうぞ。笑って結構。似てない姉妹選手権があったら絶対いいところまでいく自信があるよ」

そのセリフに良彦はケラケラ笑ったが、さすがに1年生達は無遠慮に笑うことはできなかつたようだ。あはは、なんて声がちょこちょよこ響いて、それが収まるとさっそく顧問の先生が昨年同様ランニングを始めて新入部員の厳選を行った。

「おねーちゃん……、聞いてないよ、こんな部活だったなんて……」
「言ってるないもん」

鍛えられた姉はたくましくなっていて、魔将タイムにもまったく動じない。

その横の祐午も爽やかな笑顔だ。いい汗かいた、くらいの余裕の態度で汗をぬぐっている。

「サーシャちゃん、大丈夫。毎日やってたら、すぐに慣れるよ」

「マーサだよ……」

乱れた縦ロールをよろよろと揺らし、正子はちょっと恨めしい顔で良彦を見つめた。

「よっしーはなんで走らないの？」

「俺はメイク担当だもん。舞台には立たないし。普段は後方支援つてやつだから」

「マーサもコウホウシエンがいい！」

「それじゃ祐午君とは舞台に立てないけど、いいわけ？」

「うっ……」

このしごきには耐えられないと逃げ出す生徒が今年は少ないらしく、何人かが届けを取り下げて去っていったものの、部室にはまだ20人程度の1年生が残っていた。ほとんどが男子生徒の息を切らせた汗臭い集団は、何の部活のなのかちよつと想像し難い光景になっている。

「大丈夫だよ、マーサちゃん。一緒に頑張ろう」

2年生の水島がさつとタオルを出し、笑顔で後輩を元気付けようと声をかけている。

「そっだよ。舞台は楽しいよ」

もう1人の2年生男子、酒井もなんだかデレデレした顔だ。

「わー、モテモテじゃん。やっとアンタの時代が来たみたいだね」

「えっ。これがマーサのモテ期なの？ イケメンがいないけど!？」

容赦ない少女の言葉に里芋とガリ勉メガネはショックを受けて固まっている。

「いいじゃんか、モテないよりも。それに水島君も酒井君も、まあイケメンとは言えないけどナイスガイだよ。根性あるし」

そもそも祐午はもうすぐ引退で、同じ舞台に立つチャンスは1回しかない。その辺をわかってんのかいなという気持ちで華恋はニヤニヤと妹を見つめた。

「その髪、ちよっと切ったほうがいいかな。毎日走らされるから、大変だよ」

「えっ？ やだよ、せつかく縦ロールにしたのに！」

「ゴーさんとこにつれてってあげようか」

「うん、じゃあ切る！」

妹にもあの特別優待券は使えるだろうか。ダメだと言われそうな気がして、華恋は隣に立つ良彦に声をかけた。

「藤田も一緒に行こうよ」

「え？ なんでだよ。俺はまだいいし」

「藤田が一緒の方が気合入るだろうから。期待の新人、マーサちゃんのために頼むよ」

「うん。しょうがないなあ。じゃ、メール送っておくよ。日曜でいいかな？」

「うん」

1学期が終わり、姉とよっしーと憧れの祐午君が引退して、正子はあれれ？ と思った。

あんまりかっこよくない先輩たちと、あんまりかっこよくない同級生に囲まれ、毎日竹刀に追いかけているのはどうして？

「こら、マサの字！ そのぶりっこのような動きをやめろ！」

「先生ひどい！ マサの字って呼ばないでって言うてるのにー！」

「腕をまっすぐ伸ばせ！ そしていちいち上目遣いにするんじゃない

「い！！」

ぶんつ、とツキカゲ棒が空を切る。

こんなはずじゃなかったのに。当初、少女の胸にはこの言葉があふれていた。

しかし、もう辞めてやるー！ という最後の言葉を飲み込ませたのは、魔将のこんな決め台詞があったからだ。

「お前の姉はもつと根性があったぞっ！」

その言葉が飛び出すたびに悔しい気持ち胸の底から湧いてきて、正子は疲れた体に鞭を打って何度も立ち上がった。

よっしーは言ってた。おねーちゃんはすごいんだって。

私と違って、みんなから信頼されてて、素敵な友達がいっぱいいる。

どんなにコケにされても、鼻でふんつて笑ってちつともへこたれない。

やっとわかった。おねーちゃんは、かっこいい。

見た目が可愛くても、中身がダメだったらイケメンは寄ってこないんだ。

実際にはちよつとかっこいい同級生が寄ってきていたが、みんな中身が残念な者ばかりだった。祐午ほどズバ抜けてかっこよくもないし、少々アホでも許せるようなまっすぐさとか爽やかさに欠けていて、いかにも見た目ばかり気にしている様子が丸わかりで話していてもちつとも楽しくないのだ。

男は中身だつてよっしーが言ってた。

女だつておなじはずだ。

正子は、ちよつとだけ成長した。

次の年の夏、美女井 正子は演劇部の部長になり、そのビジュアルの力で男子部員を散々集めた。

そして公立の中学校ではなかなか珍しい男子だらけの演劇部は、その迫力で全国の演劇コンクールの決勝まで進み、辻出教諭に2つ目の大きな賞を送った。

正子はそんなことよりも、素敵なOBの先輩達が見に来てくれたことの方が嬉しかったが。

そして何よりも、今までに見たことのなかった姉の全開の笑顔とこんな言葉の方が嬉しかった。

「やった！ あんたはすごいよ、正子！」

正子は胸を張って、こう答える。

「すごいでしょ、おねーちゃん！」

姉妹はまったく似ていない笑顔でパンとハイタッチを交わし、素敵な仲間たちのもとへ一緒に走った。

浮世床

号田 剛が理容師の免許を無事に取得したのは、短い教員生活に別れを告げた夏から半年ばかり過ぎた頃だった。

記念に第1号にカットしてやりたい可愛い少年にメールを送ると、中学3年生になったばかりの藤田 良彦こと愛しのスピリットちゃんも喉仏が出ているわ、声が低くなっているわ、さらにはオマケに近所に住む四角い顔の同級生を無駄に引き連れて来て、新米理容師はそれはそれはガツカリしてしまう。

「なんでビューティをつれて来るんだ」

「なんでって、そりゃ当然だろ？ 一人で来るとかありえないし」

確かにそうだ。今までだって、彼が一人でここを訪れたことはなかった。自分が欲望をむき出しにして抱きつこうとしたり、そばでじっと見つめたり、笑っているところを写真に収めたりしてきた積み重ねがこの警戒であり、それはまったくもって当然のことだった。それは号田自身もよくわかっている。しかし、止められないものは仕方がない。

「免許ってそんな簡単に取れるもんなの？」

「学校行かなきゃいけないって、インターネットで見たけど」

2人の中学生が疑いの目を向けてきて、それに対して号田はふふんと鼻で笑った。

「俺は大学を卒業した後、こっそり理容師の専門課程を受講していたんだ！ 通信教育でな！」

「なにそれ。通信教育で理容師ってなれるもんなの？」

「ちゃんとそういう部門があるんだよ」

号田は教師になろうと決心していたものの、結局理容師の世界から完全に離れることができなかった。父の経営する理容室にまつた客が来ないのが原因だ。長年やっている割に腕がイマイチな号田篤に客は満足せず、近隣に立ち並ぶオシャレな床屋さんに客をずつと奪われ続けていた。それをカバーするのは安い料金設定だったが、最近では千円払えばおつりが出るようなもつと簡単な床屋が台頭してきて、要するに父の店がピンチなのを号田青年は見過ごせなかったのである。

理容師の父と美容師の母に、幼い頃からたくさんのことを教わつた。というか、小さい頃から店の手伝いをさせられていた。店内の掃除、道具の手入れ、タオルの洗濯など、特にスタッフのいない父の理容室では息子の手伝いは貴重な戦力だった。

そのうちにカットの仕方やシャンプーのテクニク、店内のあらゆる器具の使用方法もすっかり覚えて、いつの間にか号田はかなりの技術を身につけていた。母からは成人式、卒業式などの時に店にかりだされ、メイクアップの手伝いをさせられた。こうして幼い藤田少年が「美容関係はなんでも来いのお兄さん」としてちよつとの間だけ憧れた、モグリの理容師が生まれたのである。

「さあ藤田君、カットしようか」

「うん。じゃ、頼むわ」

「親父、こつちの四角いのを洗ってくれ」

「あいよ！」

無事に息子が覚醒し、跡継ぎができて号田篤は上機嫌だ。ムカついた顔の女子中学生の髪を息子と並んで洗う。夢にまでみたシチュエーションに、涙まで浮かべている。

「剛、本当に理容師になつたんだなあ」

「泣いてるのか。おおげさだな」

「うつつ」

泡だらけの状態で放置され、華恋はますますムカついた顔だ。

可愛い少年と地味な少女のカットを終えてその後姿を見送り、号田親子は店内へと戻った。

相変わらず客は来ない。静かな店の中で、ぼそりと父が口を開いた。

「なあ剛、店を改装しようと思うんだ」

「改装？」

「お前の腕があれば客もバンバン来るだろう？ それなのにこんなオンボロの店じゃあなあ」

「確かにそうだな」

遠慮のない息子の発言に父はちよっぴりショックを受けたような表情を浮かべている。

「そんな資金があるのか？」

「あるぞ。ある程度はな」

「ある程度っていうのはどれくらいだ」

「それは母さんに相談して決めるんだが……」

弱々しい発言に息子はフンと笑う。

しかし、やっと腕のいい美容師が現れたヘアサロンGOD・Aは美しく改装されることに決まり、3ヶ月間の工事の後にちよっとオシャレな雰囲気のリ容室へと生まれ変わるようになった。

「へえ、キレイになったじゃん」

隣のGOD・Sへ先輩作の可愛い小物を買いにやってきた美女井華恋は、新装開店を翌週に控えた新生GOD・Aを見学して笑顔を浮かべた。

「そつだろつそつだろつ。来週は藤田君を連れてくるように」

「ちゃんと宣伝してるの？ もしかして、オンボロリ容室がとうと

う潰れたとか思われてない？」

「失礼なことを言うんじゃない」

ちゃんと宣伝用のチラシを用意して、近所の商店街におかせてもらったり地道にポスティングをしたりしている。

「もし割引券とかチラシがあるなら、お父さんの店に置いてもらってもいいよ」

「何？」

「不動産屋なんだよ。夏は引越しシーズンだからお客がいっぱいくるし、オススメ理容室だつて渡してもらったらいいんじゃないのかな」

「ビューティ、お前は本当に……」

いい奴だなあ、と思わず号田は下を向いた。もしかしたらこの四角い中学生は、こんな提案をするために来てくれたのかもしれないと思つたのだ。

思えば、自分が男子中学生にスリスリしようとしていることも、気持ち悪いと言いつつもなんとなくたまには応援してくれていた。こいつを味方につけておけば、何かいいことがあるかもしれない。

そんなことを考えて妙にマジメな顔になった元・先生に、華恋はニツと笑顔を浮かべた。

「ゴーさんはせっかく腕がいいんだから、お客来ないと勿体無いでしょ。もっと宣伝活動マジメにやったほうがいいよ。来たらみんなリピーターになるだろうし」

「そんなに俺のことを評価してくれてるのか」

「おかげさまでもう針金呼ばわりされなくて済んでるからね」

後姿だけなら超絶美少女を予感させる華恋に、号田はとりあえず宣伝用のチラシと硬い髪用のシャンプーとリンスを持ってきて手渡した。

「割引チケットも作る。作ったら渡すから、お父さんにぜひよろしく」

娘と同じく硬い髪質の父にもきつとこのサロン専売品は役に立つ

だろう。

「あとは、カッコよくカットしたモデルの写真とか置いたらいいんじゃないの？ オシャレな床屋ってそういうのバーンって飾ってるよね」

「ああ、確かに」

理容室のリフォームで結構な費用がかかり、号田家は今現在ちょっと貧しい状態だ。

写真だのモデルだの……いや、写真は自分で撮ったらいい。モデルは……。

華恋がやってきた週の金曜日に、ちょうど夏休みに入ったばかりの演劇部のOBたちがGOD・Aに集結していた。

「もう先生じゃないんですけど。じゃあ、なんて呼んだらいいんでしょう？」

「ゴーさんでいいよ、ユーゴ」

祐午の質問に良彦が笑顔で答える。部活動を引退した直後の中学3年生は、これから迫り来る受験のプレッシャーからちよつとだけ開放された気分でご機嫌な様子だ。

「で、今日は何の用なのかしら、ゴーちゃん。ただ単に改装祝いをするって感じじゃないけど」

よう子の疑問はもつともで、集められたはいいがパーティの用意がされている雰囲気ではない。集合をかけられて律儀に集まった6人、桐絵・よう子・礼音・良彦・祐午、そして華恋は号田の返事をちよつといぶかしげな表情で待った。

「これから、この新生GOD・Aのためにかつこよくカット&セットされた君達の写真を撮らせてもらう！」

「え？」

一人だけ、心当たりのある華恋が一步前に出た。

「もしかして、この間言ったやつのこと？」

「そうだ。紺野と、B G、ユーゴに不破！ お前達をものすごく力ツコよく、もしくは美しくセットするから今日は覚悟しろ！」

「俺は？」

「藤田君はメイクを頼む。もちろん、謝礼はさせてもらおう！」

「ちよつと意外な申し出に良彦はほえーっと小さく声をもらした。

「私は？」

「お前は雑用だっ！」

その言葉と共に、華恋に千円札が二枚突きつけられる。

「とりあえず飲み物とかつまむものを買ってきてくれ！」

「……」

色々とムカつくことはあったようだが、華恋は結局それを受け取って買出しに出かけた。礼音が自分も荷物を持つとかと申し出たが、時間が勿体無いので阻止する。

「今日はカラーリングもするから、早速始めるぞ！」

こう宣言すると美少年がちよつと不安そうな表情を浮かべた。

「そんな。髪を染めたりしたら校則違反になっちゃいますよ」

「夏休みだし、ちよつとくらいいいだろう？」

「お母さんが心配すると思いますし」

「うーむ。仕方ないな、じゃあ武川は中学生だし、黒で行こう！

不破、お前は逃さんぞ。散々世話をしてやってるんだからな！」

「その……写真は百歩譲っていいとしても、染めるのはちよつと。

父親になんと言われるかわかりませんし」

「ったく。みんなどんだけいい子ちゃんなんだ！ B G、お前はいい

だろう？」

よう子も肩をすくめ、大げさにふうとため息をついて答えた。

「ダメよ。サンダーのお母様に嫌われたら困っちゃうわ。せつかくうまくいつてるんだもの」

「なにっ！？ じゃあ、カラーリングは無理なのか……」

ガックリとする新米理容師に、こっそりそばで様子を見ていた父・

篤がそつと声をかける。

「もう1人いるじゃないか。その、メガネの子が」

「えっ？」

さりげなく名指しされた桐絵は、ちよつと緊張した顔で号田を見つめた。

絶妙な空気が店内に流れる。そして後ろの方でよう子がこっそり、祐午に耳打ちをした。

「部長、髪の色を染めたらちよつと印象が変わってますます素敵になるかもしれませんよ」

先輩の指示通りのセリフが美少年の口から飛び出す。すると桐絵は不安そうだった表情を一変させ、キリリとした目で号田に向かって頷いた。

「やります」

「おお。絶対断られると思ってたのに。ありがとうな、紺野。校則は大丈夫か？」

「大丈夫です」

急にやる気の塊と化した桐絵からまずはシャンプー台へとあがる。そこに、華恋が汗だくで戻っていた。

「ビューティご苦労！ じゃ、次はこっちでちよつと手伝ってくれ！」

「はあ？」

休む間もなく、ドリンクの準備やらタオル持ってこいやら、ついでに関係ない細かい部分の掃除まで命じられ、しかし華恋はブツブツ文句を言いながらもしつかり働いた。

「藤田君、BGから頼む」

「テーマは？」

「BGはキュートな小悪魔のサマーバケーションでいこうか」とんでもない単語にブーっと雑用係が噴出す。

「祐午君はどんな感じでいくわけ？」

「武川はそうだな……、知的な美少年、バカンスIN北欧って感じ

でいくか」

「バカンスインホクオウ？」

「不破は、ボートに乗った若大将」

「……」

「紺野は、セクシー女スパイ、日本上陸で決まりだ！」

あんまりなタイトルに最後は全員で笑いをこらえきれなくなつて腹を抱えた。しかしそれが収まると、号田と良彦は揃ってこれ以上ないくらい張り切り切りました。

「じゃ、よう子さん、キュートな小悪魔でいくぜー！」

「頼んだわよ、よっしー」

4人が全速力で改造されていく横で、華恋は時々感心しながら写真撮影のための準備をすすめた。店主である篤といっしょに大きな布を広げて、順番待ち用のスペースを改造していく。

「ごめんなあ、SFさん。手伝ってもらっちゃって」

「いいですよ。お世話になってるし。優待券ももらったし」

華恋の言葉に、篤はふっふと笑った。何か言いたげな顔をしていたが、きつと失礼なことを考えていたんだろう。それ以上何も言わずに、ニヤニヤしつつ黙々と作業を続けていった。

「あの、割引券って出来上がりました？　うちのお父さんの店に置くてゴーさんが言ってたんですけど」

「ああ、SFさんのお父さんだったのか。不動産屋さんだった？」
「そうです。この辺の物件も結構扱いがあるから、まかせとけつて言ってみましたよ」

「ありがとうねえ、本当に。短い間だったけど、剛は先生をやりに行つて良かったんだなあ。こんなに可愛い生徒たちに恵まれるなんて」

本当はただ単に可愛い少年を狙つての犯行だったんですけどね、と言つたらどうなるのだろうか。このお父さんが一体どこまで事情を把握しているのか、さすがに華恋も聞くことができない。

ああだこうだ散々指示を出されて、祐午とよう子はキメキメに、礼音と桐絵は照れながらも時折見せる真剣な表情の瞬間を見事に切り取られて無事にモデルの撮影会は終わった。すっかり日は暮れてもう時間は遅い。

「いやあ、みんな見事に変身したな！」

確かに見事だった。祐午は信じられないくらいかつこよく、礼音は男らしく、よう子はたまらなくキュートに、桐絵は誰だかわからないくらいクールな美女としてフレームに収まっていた。

「みんなありがとう。明日から早速飾らせてもらっぞ」

「ちよつとゴーちゃん、ただ働かさせる気？」

配達されてきたタイム弁当の夜限定スーパー幕の内を食べながらよう子が苦情を出す。

「レオちゃんは色々世話になってるだろうけど、私たちは違っわよ。お弁当1個くらいじゃあねえ」

「まったく……。BG、お前は本当にがめつい奴だな。せつかく可愛い顔をしているのに台無しだ」

「でもよっしーだけ謝礼アリっておかしいじゃない。ねえ、桐絵、ユーゴ」

2人はそんなこと微塵も思っていないので、コメントをできずに黙っている。

「じゃ、またボウリング大会しようよ。来週にでもさ！ 謝礼とやらはいらないから、かわりにまたゴーさんのおごりで」

良彦がニカツと笑顔を浮かべると、変態理容師はでれでれっとした顔で即座に頷いた。

「むしろこつちからお願いたいくらいだ！」

そう叫んで抱きつこうとしたら、もちろん、礼音に取り押さえられてしまった。

取り押さえられたものの、号田 剛は結構幸せだった。

ずっと悩んでいた自分の進むべき道が決まった。なにより、一時はすっかり避けられ、もう二度と会えなくなってしまったかと思っていた少年と仲良くやっている。

明日からは、新しい店舗で新しい人生が始まる。

短かったものの、教師として働いた日々も無駄ではなかった。

やたらとキレイな顔の生徒ばかり集まってラッキーだったし、可愛い教え子と楽しく過ごせるなら、ボウリングゲーム分おごるくらい安いものだ。

愛用のバズーカで撮影した写真は翌日早速大きく引き伸ばされて、新装開店した理容室の店内を美しく飾った。

時ノ浦駅前にあるヘアサロンGOD・Aは、息子の方の号田を求める客で毎日賑わっている。

ダンディライオン

「あ、ちよつと不破君！」

ビューティサロンGOD・Sの経営者である号田 合あいにこつ声をかけられ、不破 礼音は2階へと続く階段の前で立ち止まった。

「はい」

「こつちこつち。ちよつと、メールが来てるんだ。見てちようだい」

自作の小物類の販売をGOD・Sの一角で始めてから2年。

髪飾りや小箱、鏡やストラップなど、パステルカラーに彩られた可愛いグッズは美容室にやってきた客に大好評で、クリスマスには品切れをおこしかける程度にすっかりと売れていた。同時に始めたインターネットでの通信販売も好調で、こちらではオーダーメイドの商品も受け付けている。

学生であり、空手家でもある忙しい礼音に代わって管理をしてくれているのは号田家の面々、主に母である合で、本業である美容師以外の業務が楽しいのかイヤな顔ひとつせずにデコ小物ショップの運営に参加してくれていた。

「オーダーが入ったんですか？」

「ふっふー。違うわよ。早くおいで！」

自宅から家へと続くスペースに置かれたパソコンの前に招かれ、礼音は座った。

「これこれ、ほら！」

実は美容室に来たお客をほつたらかしにしている合が嬉しそうな顔で画面を指差す。

WebShop Dandelion 様

突然のメール失礼いたします。

「We Love Handmade!」編集部、安田と申します。

こんな文から始まったメールには、雑誌で今度ネット上で活躍するハンドメイド作家特集をすること、礼音のサイト、ついでに作家本人に取材をして掲載したいがどうだろうか、と書かれていた。

「やったわね。すごいじゃないの不破君!」

「ええ、あの……」

作家本人に取材、の部分だけ断つてもいいだろうか。

高校2年生のシャイボーイはそんなことを考えていたが、それは既に無理だということがすぐに判明した。

「OKって返事しといたから!」

「!?!」

慌てて送信済みの一覧をチェックすると、かなり浮かれたテンションで引き受けることが書かれたメールがある。

「困ります」

「どうしてよ? いいじゃない。有名になるチャンスだもん! 土日ならオッケーですって書いておいたからね!」

号田 合はうきうきと体を揺らしながら待たせている客の元へすっ飛んで行ってしまった。

さすがに接客中に文句をつけに行くことはできない。

大体、世話になっている人だ。

オーダーメイド品の注文を勝手にドカドカ引き受けて徹夜したこともあったが、その時は責任を感じたのか一家で梱包や雑用を引き受けて一晩中付き合ってくれた。夫や息子はいい迷惑だったろうが、皆一緒に作業をしてくれた。

しかしそれはそれ、これはこれである。

「We Love Handmade!」

そんなラブリーなタイトルの雑誌から取材を受ける？

やってきた記者は引くのではないだろうか。こんなデカイ図体の男子高校生が空手と並行してスイーツをデコデコしているだなんて。

メールについていたリンクを辿り、件の雑誌のホームページもチエックする。

今月注目の作家、なんてコーナーもあり、そこにはOLをやめてハンドメイド作家になったとか、主婦業のかたわらに作ってますとか、顔写真つきで作者のインタビューが掲載されていた。

サイト全体もとにかく女性的で、花とか刺繍とかホイップとかキラキラのラインストーンとか、ファンシーな雰囲気で満ち溢れている。

ここに自分が加わることは許されない……！

万が一にも学校の同級生が見るとかそういうことはなさそうだと思うが、それでも自分が載れば場違いすぎて目立つ。そんな恐ろしい事態を避ける方法はないか、純情少年は作業場に移動するとシリンコンの塊とにらみ合いながらしばらく考えた。

「どうしたんですか、レオ先輩」

ブログからメールを送ると、すぐに頼もしい後輩がやってきてくれた。

秋谷南高校1年、美女井 華恋。彼女なら事情も知っているし、適任だと礼音は判断して声をかけたのだ。

「実は雑誌の取材を受けることになったんで、俺の代わりにやってくれないだろうか？」

「はあ？」

華恋が四角い顔をくしゃっとしかめると、横で一休みをしていた号田 剛はゲラゲラと笑い出した。

「ビューティに何の用かと思ったら不破、そんなことを頼むつもりだったのか！」

「先生は黙っててください」

ちなみに礼音は号田 篤をマスター、合をアイさん、そして剛をなんとなく情性で先生と呼んでいる。

「ビューティ、頼む」

「いやいや……そんな、嘘はいけませんよ。大体こんな顔のやつだっと思ったらみんな買ひ物してくれないと思えますけど」

「そんなことはないだろう。作品に顔は関係ない」

「……まあ、そうかもしれないけどね？」

仏頂面に号田がますます激しく笑い出し、ムカついた華恋に蹴りを決められる。

「よう子さんあたりに頼んだらどうですか？」

「よう子は服のコンテストなんかによく出ているし、入賞して顔が出たこともあるし、頼めない」

「部長は？」

「部長は無理だろう。多分、まともじゃべれないと思うし、そのうち脚本家になったらやっぱり顔が知られるかもしれない」

「なるほど。私だったら世に出る心配はありませんもんね」

どうにもフォローのしようがないところまで後輩を追い込んでしまつて、礼音はちよつと慌てた。

「おう！ じゃあ俺にいい案があるー！」

「どうせロクな事じゃないから聞かなくていいですよ」

冷め切った女子高生のセリフはお構いなしに、号田がシャウトする。

「藤田君に可愛く変身してもらえばいいじゃないか！ 架空のキュートなハンドメイド作家なら誰にも迷惑がかからないぞー！」

「ゴーさんが見ただけじゃなか」

思いつきりバシンと突っ込まれている光景を見ながら、それはいい案かもしれないと礼音は思った。

「そうだ、架空の人物ならば誰にも迷惑はかからない。いや、よっしーには少々かかるが。」

「ビューティ、よっしーに頼めないだろうか」

「レオ先輩まで何言ってるんですか……。あいつが引き受けるわけがないでしょ。大体最近結構大きくなってますよ、あいつも。もう前みたいに可愛くは仕上がらないんじゃないかなあ」

「そうか」

しばらく会っていないチビっ子少年の姿を思い出す。

「へたすると女装の人なんだなって勘違いされるかもしれないし、やめておいた方が無難でしょ」

「よっしーのお姉さんはどうだろう？　今、ビューティのお父さんの会社で働いてるんだよな？」

「うーん。確かにゆうちゃんなら引き受けてくれそうな気もするけど、左手の動きは完璧じゃないからどうかな……」

「ああ」

あまり詳しくは聞いていないが、病気を抱えているという話は知っていた。デリケートな問題に触れそうな気がして、じゃあこの案は諦めるとして他に誰か候補がいらないだろうか。

「……ビューティのお母さんはどうだろう？」

さすがにこれには呆れたようで、華恋は乾いた声で笑った。

「もう諦めて自分で受けたらどうですか？　大体、顔は出さないでつて言えば問題ないと思いますけど」

「いや、取材そのものも……、ちょっと恥ずかしいじゃないか」

「じゃあなんで受けちゃったんですか」

「それは」

勝手に受けられたんだよ、と小さい声で返す。

「大丈夫ですよ。むしろこんな若い男の子が作ってたってわかった

ら、取材に来た人も喜ぶんじやないですかね。意外性があってテンション上がったちゃうかも」

「そうだろうか」

「そうですね。それに、どうやって作ってるかとか、どんなポリシ―を持ってやってるかなんてレオ先輩以外に語れないわけだし。自分の作品に責任持つなら、やっぱり自分で受けないとダメだと思いますよ」

「……」

まっすぐ真剣に語る後輩の言葉に思わず頭を下げる。

その通りだ。自分が未来に向けて作っている作品たち。みんな可愛い自分の子供のようなもので、それを他人に説明させるなんてとんだ邪道な事をしてしまうところだった。

そんな反省をしてから、礼音は顔をあげて情けない表情で笑った。「ビューティ、ありがとう。自分でちゃんと受けることにするよ」

「良かった。っていうか私、来た意味なかったですね」

せっかくだからトリートメントしてよ、なんて気軽に言っている華恋の姿に思わず微笑む。

来た意味はちゃんとあった。こうして、納得のいく結論をだしてもらったんだから。

そして2週間後、礼音は号田家を舞台に生まれて初めての取材を受けた。

180センチを超える大きくて分厚いボディに最初はちょっと驚いていた編集部の安田さんからぶつけられる質問に言葉少なに、しかし誠実に答えていく。

「では最後に。ハンドメイドをやっていくのに一番必要なものはなんですか？」

この質問に、礼音は幸せそうな微笑を浮かべてこう返した。
「友情です」

編集部の面々は少しきよとんとした表情を浮かべたものの、大きな少年の清々しい笑顔につられてふっと笑うと、取材を終えて帰っていった。

そして3カ月後に出た「We Love Handmade!」に礼音のWEBショップとインタビューが掲載された。謎のシルエツトが語るハンドメイドの秘訣はやけに男らしくて、それがかえって受けたのか、順調に売り上げを伸ばしている。もちろんその分、忙しさは増していく。

こうして不破 礼音は学生として、空手家として、世にも貴重な肉体派ハンドメイド作家として今日も充実した一日を過ごしている。

Sweet Season

卒業まであと3ヶ月と少し。

クリスマスを目前に控えた落ち着かない町をゆつくりと優季は歩いていた。

学校の授業は午前で終わり、来週に開催される弟のバースデーパーティの打ち合わせの為に美女井家へ向かう。主役の弟は受験勉強のための家庭教師役を頼まれ、カツコイイ友人の家に行っていて不在だ。お昼ごはんの準備を考えなくていいのは気が楽で、冷たい空気の中でも足取りは弾む。

優季は冬が好きだった。夏はどうしても、体が重たい。

今のところ治す方法のない持病の影響だ。症状自体は収まっているのに、体が温まると過去に出ていた症状が一時的に蘇るという不思議な後遺症があつて、暑い時期はどうしようもなくダルい。

それでも、時々休みながらも学校へ通い続け、あと少しで卒業できる。一年休学したおかげで周囲はみんな年下だったが、仲良くしてくれた。困っている時には手を貸してくれる友人がたくさんできていたし、勉強にもなんとかついていけた。成績はよくないが、留年の心配はしなくてよさそうだ。

一応インターホンを押し、でも応答を待たずに扉に手をかける。

「こんにちはー」

「あ、いらっしやーい！」

奥から美女井家の母が笑顔でやってくる。

「お疲れ様。寒かったでしょう？」

「いやー、歩いたら結構、ポカポカしちゃいました」

リビングへ移動し、コートを脱ぐ。ソファにはこの家の姉妹が揃

って座っていて、優季の来訪をちつとも似ていない笑顔で出迎えてくれた。制服の上のブレザーも脱ぐと、すぐにお茶が運ばれてくる。「ありがとうございます」

「もうすぐパパが帰ってくるから、そうしたらみんなでお昼にしましょう」

「おじさんが？ なんだか珍しいですね」

美女井家の父が経営している不動産屋は確かに近くの商店街の中にあつたが、昼食をわざわざ家に食べに戻るといふのは今までにないパターンだ。

「何かイベント？ 昇進した……、とかはないもんねえ」

「ないね」

四角い姉の方の美女井が真顔で頷く。隣ではショートカットも良く似合う美少女丸出しの妹がうーんと首をかしげている。

「社長の上つて会長とか？」

「グループ会社でもあればそんな役職も出てくるのかな？」

そんな展開があるわけない、と3人の女学生はケラケラと笑った。そこに、噂の男が帰宅してくる。

「ただいまー！」

長女そっくりの四角い地味顔がリビングに現れる。手洗い、うがいと風邪予防2点セットを済ませた一家の主が戻ってくると、ランチが始まった。

「優季ちゃん」

全員の皿が空になり、母と娘たちが片づけを始めたところで声がかかった。

「なんですか？」

「優季ちゃんは大学には進学しないって言ってたそうだけど、就職先とかはもう決まったのかな」

成績がどうにもあがらないし、どうしても行きたい進路がないことは、美女井家の母にぼろりと漏らしたことがあつた。なので進学

はしないつもりだったが、就職はもつと大変だ。1年休学している
ので病気のことはどうしても話さなければならぬし、再発のリス
クもある。体は思う存分動かないものの、かといって「障害者」と
いう枠には入れない。中途半端な状態の女子高生は、面接に行くた
びに実はこっそりと落ち込んでいた。

それが見た目にわかるようになっていて、心配されてしまったの
だろうか。そんな考えが頭をよぎって、優季はちよつと情けない笑
顔を浮かべた。

「いやあ、それが連戦連敗で」

何十社も受けたわけではない。同じように就業を目指す同級生に
比べればちよつとも頑張っていない就職活動だったが、どこからも「
こいつは困ったな」みたいな扱いをされている事に気がついて、今
は少しリフレッシュをと休んでいるところだ。学校側も複雑な事情
を氣遣つてか、ここのとこ何も言つてこない。

そんなちよつぱり意氣消沈な優季に、美女井 修は眩しいくらい
の笑顔を見せて答えた。

「それは良かった」

「……良かった？」

「実はね、うちの会社の事務の子が1人、3月で退職することにな
つたんだよ。結婚して引越しちゃうからって。良かったら優季ちゃ
んに来てもらいたいと思つてるんだけど、どうだろう」

突然降つて湧いた幸運に、優季は目をまあるくしてしばらく黙つ
てしまった。

「えーと……」

胸のうちに絡み合う複雑な気持ちは、目の前のあしながおじさん
にはすぐにバレてしまう。

「やりたい仕事があるとか、興味のある事が他にあるんだつたら、
遠慮しないでいいんだよ。もし良かったらつて話だから」

「いや、お話はすごく嬉しいんですけど、でもなんていうか、ちよ
つと図々しいかなつていう気持ちがこつ、出てきちゃつてですな」

「ははは」

今までだつて信じられない程お世話になつてきている美女井家の面々。退院したばかりの不自由な暮らしをあらゆる面から支えてもらった。情けない親子関係を改善できたのも、この家の人たちの世話になつていたからだ。自分だけではなく、弟も一緒に。

「図々しくはないよ。……優季ちゃんはなんといつても可愛いから事務所にいてくれたらみんな張り切る。それに、明るいから。よしー君もそうだけど、声を聞いていると元気が出るんだよね。その力をわけてもらえたら嬉しいんだけどな」

「でも、仕事がちゃんとできるかどうか」

「そんなのは最初は誰でもみんな同じだよ」

ここで美女井家父の顔は、社長・美女井 修のものになった。腕組みをして、妙にまじめくさつた顔でうんうんと頷く。

「あのね、優季ちゃん。人を採用するっていうのは結構大変なんだよ。履歴書を見ればどういう歴史を辿ってきた人物かはわかるけど、例えば真剣に働いてくれるのか、信頼に足る人物なのかまでは雇つて一緒に働いてみるまではわからない。もちろん、わかりやすい人材もいるけどね。期待して入れてみたらとんでもないヤツだった、なんてこともあるんだよ」

キツチンの奥で、3人がなんとなく聞き耳を立ててどうなるかを窺っている。

「だから、どういう人物がよくわかつている人が来てくれるっていうのは、会社としては助かることなんだ。仕事はちよつとずつ覚えていけばいいから問題ないし」

「でもなんていうか、これってコネ入社ですよね」

「はははは」

なんとなくズルな気がして優季はこう言ったのだが、思いつきり笑われてしまった。

「ヘッドハンティング……じゃあないか。これは、スカウトだな。」

私は優季ちゃんのことを買つてるから、正社員で採用したいんだだけ

ど。どうかな？」

もちろん、こんなに喜ばしい話はない。職場が近ければ通うのも
楽だし、なによりもよく知った人の会社だ。きつと低賃金で酷使さ
れるような心配はないだろうし、病気のことにだって理解がある。
だけどそれよりも、自分を評価してもらっていることが嬉しい。
もしかしたら「同情」も少しはあるかもしれない。けれどそれな
ら、もらったチャンスに努力で報いるまでだ。病気になった時、も
しかしたら自分は社会のお荷物なんじゃないかと悩んだことがあっ
た。そうではないと、自信を持てるかもしれない。

優季はポジティブな気持ちで一晩かけてそう考え、次の日、お世
話になりますと美女井社長に挨拶をした。

こうして就職を決めてから、1年。

「いらっしやませー」

来客を報せるチャイムがなり、いつものとおり声をあげ立ち上が
る。

目の前に立つ青年が誰かに気がついて、優季は少し驚いて足を止
めた。

「あれ」

「優季、久しぶり」

北島 暁彦。小・中学校の同級生であり、友人。よう子の兄で、

弟の良彦のボウリングの師匠でもあるアキ君だ。

少し明るすぎる金髪に、細くそった眉はあまり上品とはいえない。
美形の妹に似て整った顔立ちだが、顔色はあまり良くななく、かつて
仲良く時を共有していた頃の健康そうな印象はなくなっている。

「こちらへどうぞ」

知り合いとはいえ、お客様だ。相談カウンターの椅子を勧め、優
季も向かいに座った。

「どういった物件をお探しでしょうか？」

「ははは」

改まった態度の元同級生がおかしかったのか、暁彦は軽く笑う。

「良かった。元気そうで安心したよ」

「……おかげさまで」

暁彦と最後に会ったのはいつだっただろう。

はつきりと病気の診断がされる前、優季は1ヶ月以上「調子が悪い」日々を過ごしていた。それでも家の事をしなくてはならない。掃除に、洗濯、食事を作って、弟の面倒だつて見なくてはいけない。だるい体に鞭を打って家事をこなしていた。

とうとう体が動かなくなってしまった姉を見て、良彦が連絡をしたのは暁彦だった。父は仕事中で捕まらず、頼れる親類もない。慌てて自転車でやってきた同級生に付き添われて、救急車に初めて乗ったのだ。

「一人暮らしをしようと思ってさ。この辺にいい部屋ないかな。で

きたら、保証人がいらないとこがいいんだけど」

「保証人がいないっていうのはちよつと……」

「最近そういうの、あるんだろ？」

「20歳以上じゃないと親権者が契約をすることになりますけど」

「20歳だよ」

「まだでしょ？」

優季はもう成人しているが、誕生日が少し遅い暁彦はまだ19歳のはずだ。

「じゃあ優季が保証人になってくれよ。ここの社員だったら、なんとかできるだろ？」

やってきた客に色々と書き込んでもらう為のカードの束から視線をうつして、暁彦を見つめる。

何故突然、ここに来たのだろう。

真剣に部屋を借りたいのかどうかはわからないが、おそらく自分に会いに来ることが目的の一つだろうと優季は思った。

「それはちよつとできません。公私混同になつちやうから」

「そりゃそうか。でも、他に頼れるヤツがないんだよ。なんとか頼めないかな？」

「……私がここで働いてるの、誰に聞いたの？」

優季の質問に、暁彦はふつと笑って答える。

「よしのヤツにだよ。昨日バツタリ会つたんだ。背が伸びたよな。あんなにチビだったのにさ」

そんなこと、言つてなかつたのにな。

昨日の夜一緒に食事をした時に、暁彦の話題は出なかつた。弟が何を思つて黙つていたのか考えると、なぜかちよつと腹が立つ。

「保証人はともかく、予算とか部屋の間取りの希望にあうものがあるか探しますので」

「はいはい」

ちよつと笑いながら、差し出された紙を暁彦が受け取る。お世辞にもきれいとはいえない字で、お客様カードが埋められていく。

北島 暁彦

優季が入院してしばらく、よう子と暁彦には随分と世話になった。姉の前では泣くのを必死にこらえていた良彦を慰め、不安に落ち込む優季のそばに寄り添つてくれた大切な友人兄妹。

会わなくなつたのは、自分のせいだ。

優季の心に蘇るあの日の景色。よく晴れた気持ちのいい日だった。

秋が深まり、冬が近づく。自分の人生にも凍えてしまいそうな、見通しの立たない不安に震える日々がやってきていた。自分の体なのに思うように動かない、薬のせいでひどく気分が悪い、顔はパンパンに膨れて別人のよう。どうして自分がこんな目に遭わなくてはいけないのか、不条理でやるせなかつた。こんな人生を歩み続けるくらいなら、消えてなくなつた方がマシだとすら思えて、そんな自分がひどく哀しかった。

弟が毎日やってきては笑顔でただ隣に座る。

何か言いたいことがあるのをこらえている。言えはいいのに、という気持ちを自分もこらえる。こらえる姉に、弟もこらえる。泣けば弟もこらえ切れなくなる。だから、自分もこらえる。

そうやって、2人で涙を出さないように必死だった。

そんな日々に限界が来て、とうとう迎えたあの日。

良彦と一緒にやってきた暁彦は、大切な友人のためにこう、声をかけた。

「大丈夫、すぐに良くなるよ」

今ならわかる。たかだが中学生の男の子が、原因も治療法もよくわからない病気にかかってしまった友人を励ますために言える言葉なんかこのくらいしかない。そこに悪意はなくて、ただ、元気になるってほしいという祈りだけがあつたはずだ。

しかし、この言葉で堤防はあっさりと決壊してしまった。

そんな気休めを、言わないで

溜め込んでいた分、出てきた涙は随分多かつた。体中から水分を搾り出してもまだ足りないと思えるくらい、何時間もずっと泣いた。良彦も一緒になって、だけど声はあげずに涙だけポロポロと流している、暁彦がそっと病室から連れ出してくれた。

それ以来、彼がもう来ることはなかつたのだ。退院後に学校で見

かけることはあっても、話しかけることも、話しかけられることもなかった。

「これでお願ひしますよつと」

テーブルの上に希望の条件がかかれた紙がすいっと出される。それをチラッと見ただけで優季は呆れた、と呟いた。

「こんな物件あるわけないよ」

「わからないでしょ？ ちゃんと調べてよ」

「こない家があつたら私が借りてるね」

ものすごく広くせに安い、駅近でコンビニがすぐ隣。そんな都合のいい部屋はない。調べるまでもない。

「お客様に失礼だな」

暁彦が慥然とした表情で放った言葉に、思わず顔をあげる。

「……それは失礼いたしました」

「相変わらずだな、優季」

優季も思った。アキ君も、相変わらずの優しい笑顔だね、と。

たったこれだけなのに、6年分の空白が埋まっていく気がする。

「俺もさすがに家を出ようと思ってるんだ」

「そうなんだ」

「変な連中とは縁を切つたし、ちゃんと仕事もする。来月から働くところも決まつたんだ」

高校に入った頃くらいから家にはちつとも寄り付かず、ガラの悪い連中とつるむようになったことはよう子からなんとなく聞いていた。

それで、あの時のお詫びができないままここまでできてしまったのだ。また会えたら、あの時はごめんねと一言告げたかったと、ずっとずっと思っていた。

「アキ君」

「何その呼び方。公私混同じゃねえ？」

「ちよつとカツコイイ笑顔に、思わず口をとがらせてしまう。」

「働くんだったらその髪、マズインじゃないの」

「ちゃんと黒くするよ」

「よくそんな傷んだ髪で採用されたよね」

「イヤミを言いつつ、カウンターの下に入っているおすすめヘアサ

ロンの優待券を取って差し出す。

「号田さんのお店に行けば一発で直るんじゃないかな？」

「あの親父さんじゃ無理だろ」

「今は親子でやってるんだよ」

「ゴーさん理容師になったの？」

「優季が頷くと、暁彦は優待券を手に取ってしげしげと眺めた。

「あんなにイヤがってたのにな」

「全然会ってないの？ アキ君が行ったら喜ぶんじゃないかな」

「その言葉にまたふつと笑顔を浮かべると、暁彦は立ち上がった。

「20歳になったらまた来るよ」

「物件は？」

「また今度来るから、いいの抑えといて。清潔感のある髪型の勤労

青年になっておくから、よかつたら保証人になってくれよな」

「かっこよく身を翻し、右手をさつと挙げた暁彦の背中に、優季は

こう声をかけた。

「それは無理！」

ガクつと膝を折る姿にケラケラ笑つと、暁彦も照れくさそうな笑顔で振り返って、改めて手を振ると店を出て行った。

外は冬。クリスマスに浮かれる町並みに、何色ものイルミネーションが輝いている。

来月20歳になる彼はいつ、再び目の前に現れるだろうか？

再会とともにやってくる新しい1年のスタートへの期待に顔を綻ばせると、優季は新しいお客様情報カードを「か行」のファイルに収め、自分の席へと戻った。

「よし、今日の稽古はこれで終了だ!」

座長の声が響き、劇団員たちが散っていく。

「武川! ちよい、こっち来て」

皆が水を飲んだり、夕食をどうするか話し合っただざわざわとする中、祐午は一人座長の前へ進んだ。

「はい。なんででしょう?」

劇団 まどか。テレビにはあまり出ないものの、舞台で活躍している俳優を数多く育てている世間的にはマイナーだが歴史は古いこの劇団に祐午が入ったのは今から四年前。高校に入っただけで、それからだ。

高校に入っただけで梅原 昭三にあてて「俳優を目指して頑張ります」と送った手紙への返事にこの劇団の名前が挙がっていた。よければ紹介しようと筆でかかれた便箋に祐午は飛び上がって喜び、入団を決めた。

学校が終わってから毎日帰りには寄って、汗を流す日々。

なんとか単位ぎりぎり卒業してからは、アルバイトをしながら演劇に打ち込んでいた。

前向きにしっかり頑張る姿は先輩受けもよく、その情熱から若いながらも公演のたびに役を与えられていた。最初こそ後ろに集まる群衆役だったが、次回の公演ではとうとう物語のキーマンである主人公の友人役を与えられて毎日練習を重ねている。

「お前に質問がある」

「はい」

座長はおほんと咳払いをし、ちよっただけ小さな声で祐午にこう尋ねた。

「お前、彼女はいるのか？」
間髪いれずに青年は答える。

「いえ、いません」

「本当か？ モテそうなのに」

「そんなことありませんよ、全然」

爽やかなスマイルがイヤミに思えたのか、座長はちょっとだけムカついたように顔をしかめた。

「……まあいい。現実がどうかと、お前がどう感じているかは別だからな。で、彼女は今までに何人いた？」

「今までに、一人もいないです」

「なに？ 誰かに恋したことは？」

「うーん。そういえばないですね」

「……」

キレイな顔があつさりと答える様子に、座長はムカつきを飛び越えてちょっと呆れた様子だ。

「お前は何をやってるんだ？ いくつだっけ、19だったよな、確か」

「まだ18ですよ。早生まれなんです」

「そういう細かいところはいいんだよ。とにかく、年頃の男子が女子を意識しないっていうのは問題だな。もしかして男が好きとかそういうことなのか？」

「男が好きっていうのは？」

「恋愛対象が同性なのかってことだよ」

「ええ？ そんなわけないじゃないですか」

ちょっと気持ち悪そうに腕をさする姿に、座長はちょっとだけ安心した。しかし、それならなんで、という気持ちが湧いてきて、目の前の美青年がますます理解できなくなっていく。

「とにかくだ。お前にもうちちょっと色気のある演技をしてもらいたいんだ」

「色気……」

「待て。まあ、待て。お前の想像しているお色気とは違うぞ。恋愛の経験があるものだけが醸し出せるオーラがあるんだ。それをゲツトしてくれ。そうすれば武川 祐午は無敵になれるはずだからな」
「無敵ですか。無敵って、すごいですね！」

祐午の脳内でどんなイメージが浮かんでいるのか、座長にはまったく想像がつかない。星を取って点滅しながらヒヤッハーしているんじゃないだろうかと不安を感じつつ、目の前の若者の肩をパシパシと叩く。

「とにかくだ。今までに誰か、この子はかわいいなあとか、一緒にいて楽しいなあとか、そういう女の子はいなかったか？ いたかどうか？」

「今までに……」

祐午は頭の中で思いを巡らせた。

過去にこの子は可愛いなあ、と思ったといえば、よう子さんだ。よう子さんはきれいだった。

だけど、ちよつと怖い。あと、すごく年上の彼氏がいて、なんだか遠い世界の人だった。

「どうだ？ いるか？」

「いましたけど、彼氏がいるんです」

「そういうのは別にいいんだよ。彼氏がいようがいまいが、恋するのは自由だろう？」

「えっ。そうなんですか？」

「バカかお前は！」

座長に突然怒鳴られ、祐午はビクッと体をすくめてまた考えた。

一緒にいて楽しいなあ、と思ったといえ、ビューティだ。

四角い顔のビューティ。怒りっぽいけど、優しく、頼もしかった

た。

でも僕よりもよっしーの方が仲良しだ。

だけど自由……。自由か。そうか。自由だ。

「あの、いました！一緒にいて楽しかった人！」

「そうか。それは良かった。じゃあお前、その子とちょっとデートしてこい！」

「デート？」

「そうだ。誘って出かけていちゃついで、捨てられるもんは全部捨てて来い！」

「捨てられるものは全部捨てる……！？」

真剣な顔でわかりませんオーラを全開にしてくる祐午に座長は衝撃を覚えながら、しかし前途ある若者のためだと近くにあった紙にメモをし始めた。

「ここにデートのプランをかいてやる。この通りにやってくるんだ！」

台本をコピーする時にミスった紙の裏に、猛烈な勢いでデートプランが書き出されていく。

「いいか。このデートの目的は、恋人気分を学ぶことだ。相手のことをお前がどの程度思っているのか知らないが、とにかくお前の一番愛しい恋人だと思ってデートしてこい！ドキドキワクワクウキウキハラハラキョクキョクしてくるんだ。わかったな！」

「ハラハラキョクキョク……」

座長からの命令を受けて、祐午は電車を降りると家とは逆方面の出口へ向い、懐かしい母校へ続く道を歩いた。

中学校の演劇部、懐かしいなあ。そんなことを思いながら、スタスタと歩く。

あの頃よりもずっと背が伸びて、顔も大人っぽくなり、イケメンぶりに磨きがかかっている祐午は、歩いているだけで女性が何人も

振り返る。

ただし、本人は気づかないし、気にしない。

目的の友人の家の前には、人影があつた。それに気がついて祐午は早速声をかける。

「マサーシャちゃん！」

人影は2人。そのうちの1人が声に反応して勢いよく振り返つた。祐午君！ うわっ、久しぶり！」

高校2年生になつた美女井 正子は嬉しそうに声をあげると、隣にいた男子にもういいから帰れと命令をした。せつかくお目当ての彼女を家まで送つた男子高校生は抗議をしようとしたが、突然現れた王子様のようなイケメンに勝てる気がしなかつたのか、肩を落とすて去つていく。

「マーサに会いに来てくれたの？」

「違うよ。ビューティはいるかな？」

あっさり否定され、正子はうぐぐ、と声を漏らした。しかし祐午の人となりは承知しているので、すぐに気を取り直して先輩を家へと招きいれた。

「わあ」

それから30分ほどして帰宅した華恋は、リビングに入るなり驚きの声をあげた。

「ビューティ、おかえり！」

「いらつしやい祐午君……。どうかしたの？」

よいしょとカバンを降ろし、相変わらずの地味な四角い顔で友人に質問をする。

「うん。あのね、来週ヒマな日があるかな？ 僕とデートしてほしいんだよね！」

この言葉に、並んでコーヒーを飲んでいた美女井家の父と次女がブーっと噴き出す。

「……デートって？ どういう意味？」
「え？ 普通のデートだよ。僕と二人で出かけて、一緒に過ごすって欲しいんだ」

あまりこの青年を知らない父・修はこのまま自分がここにいていいのか判断がつかずそわそわと足を震わせている。

正子はこのまさかの用件に悔しいやら面白いやらでやっぱり足を震わせている。

そして長女の分のコーヒーを入れて運ぼうとしていた母・美奈子は目をまんまるにしたまま微動だにしない。

そして人生初のデートを申し込まれた当の本人、美女井 華恋は冷静だった。

「なんか理由があるんでしょ」

「うん。実はね、座長がデートしてこいって言ったんだ」

そのまま祐午の口からは今日受けた命令についての説明がなされた。

それを聞いて、美女井家の面々もすっかり落ち着きを取り戻したが、同時にかなりガツカリの状態だ。

「なんで私を選ぶかね？」

「ダメかな？ 僕はビューティが一番いいと思ったんだ」

この言葉にはさすがの華恋もちょっと照れた。いや、かなり照れて、顔を真っ赤にしてしまった。

そういう意味じゃないはずだ、という思考がギョングョンと脳内で飛び交うが、祐午スマイルの破壊力は半端ない。

「ダメじゃない……よ」

「ああ、良かった！ やっぱビューティに頼んで正解だね！ じゃあ、日程を決めよう」

人の良いまっすぐな青年の頼みを断ることができず、華恋はカバンから手帳を取り出すとスケジュールを確認した。そして、金曜日

の午後にデートの約束をすることが決まる。

「楽しみだなあ。僕、デートって初めてだよ」

「嘘でしょ!?!」

「嘘じゃないよ。僕は嘘はつかないんだから」

そういえばそんなこと言ってたな、と華恋は中学時代のことを思い出した。俳優が芝居以外で嘘をついたらダメなんだとかなんとかそんな思い出に浸っている赤くて四角い顔に笑顔を向けると、祐午は手を振って美女井家を去って行った。

「じゃあまた来週にね!」

駅前に立つ祐午は目立つ。

ちよつと遠くから妙にオシャレをしてシャキッと立っている友人を見て、華恋はそんなことを考えた。

ちらほらという通行人、特に女性はみんな背の高い美形男子を見る。チラ見する。若い子も年配の女性も、とりあえず見ずにはいられないようだ。

そこにこのスクウェアフェイスが行っているものだろうかという悩みは払拭できないが、そんな理由でドタキャンをするわけにもいかない。

「お待ちせ」

「あ、ビューティ！ 良かった。待ってたよ」

笑顔とともに、ドでかい花束が差し出される。

「わああ」

オレンジと黄色の2色で構成された、薔薇の花束。受け取ると、はつきりいつてかなり重い。

「黄色の薔薇の花言葉は、可憐、なんだって！ ビューティにピッタリだよね」

華恋自身は可憐とは程遠い印象なので、ただのダジャレになって

しまっている。しかし明るい笑顔の祐午に、そんな悪意はないということを華恋はちゃんとわかっていた。そこにさらに、追撃。

「オレンジはね、愛嬌だよ」

「ははは」

ロマン成分ゼロの正直すぎる花のチョイスに乾いた笑いが漏れる。そしてなにより、やっぱり重量がある。

「祐午君、これ、嬉しいんだけど持って出かけるには重いかも。どこか、コインロッカーとかに預けてもいいかな？」

「じゃあ僕が持つよ」

「いやいや。これ、大きいでしょ。せつかく出かけるんだから、持っていくのはどうかと思うよ」

「わかった。じゃあ、預けてくるね！」

せつかくの立派な花束が暗いロッカーの中にしまわれる。デートの最初に出す花束は小さくないと邪魔、そんな豆知識を今日、2人は学んだ。

B e M Y B a b y ・ 前編（後書き）

後編に続く！

女子大生と俳優志望のフリーター、2人きりの時間が始まった。

まずは電車に乗り込んで、遊園地へと向かうというのが座長の考えたプランだ。海の近く、大きな観覧車が有名なアクセルランドに行くよ、と祐午が笑顔で華恋に話す。

ニコニコと人の良さそうな顔を、華恋はちょっとテレながら見つめた。

そんな緊張した四角い顔を、祐午はまじまじと見つめ、考えた。何か話しかけないと。

「ビューティはデートってしたことある？」

「え？ ああ……ううん、集団ででかけたことはあるけど」
「あるんだ」

「ま、でも、ロマンティックな要素は一切なかったんだけどね。みんなそれぞれお目当ての相手とどこかへ行っちゃったし」

しらけた気分で一人帰宅したことを思い出し、四角い顔はますます角張る。それを見ていたら、祐午の頭の中に座長から出されたテーマがふんわりと浮かび上がってきた。

ドキドキ ワクワク ウキウキ ハラハラ キュンキュン

あのテーマが出されてからしばらく考えていたが、これは、自分だけではなく相手もそういう気分させる努力が必要なはずだ。では、今ちよつと苦い顔になっているビューティになんと言ったらいいだろう。ちよつとキザな、いい男ならなんていう？

「じゃあ……、誰かと2人つきりってというのはビューティも初めて

なんだね」

これは効果的なセリフだった。つり革につかまって立っている華恋の顔がみるみる赤く染まっていく。

「こっちは祐午君がデートしたことないっていうのが信じられないんだけど」

「僕は学校以外はほとんど稽古だったから」

「じゃあ今は、バイト以外はほとんど稽古なの？」

「そうだよ。それに、一緒に過ごしたい女の子も別にいなかったし、これも効果的なセリフだったようで、四角い顔は軽く爆発した拳句プイッと外をむいてしまった。

もちろん華恋は恥ずかしくてとても祐午の顔を見ていられないだけなのだが、そうさせた本人の意識は違う。

もつと僕を見てもらわないと。ドキドキ（略）キョんキョんだ。

「今日は華恋って呼んでもいい？」

「ほふうっ!？」

妙な返事をして、華恋がのけぞる。

「僕のこと祐午って呼んでくれていいから」

「……………それはっ……………」

大真面目な顔で自分を見つめる祐午に、華恋はかつてないほど焦った。頭の中で新しい宇宙が生まれてもおかしくないほどの大きな爆発が起き、まともな思考がごとごとく吹っ飛んでいく。

目をまわして参っている女子大生を、祐午は優しい微笑みを湛えて待っている。

ようやく少し気分が落ち着いてきて、華恋はなんとか答えを出さなくてはならないと黒煙をあげる頭を働かせた。

彼が今日求めているのは、恋人気分の疑似体験だ。所属している劇団の座長に受けた命令で来ているのだ。これは芝居に、彼の俳優

としての経験に必要なものであつて、実際に自分と男女交際をした
いと求めているわけではなく、名前で呼び合うなどという行為をす
るのは本日、家に帰るまでなのである。なので必要以上に照れる必
要はない。照れる必要がそもそもない。中学時代にやった演劇部の
芝居と同様の行為であり、これは自分を頼つてくれた友人のために
必要な事なのだ。これを断るくらいなら、そもそもデートを引き受
けたのがおかしいのであり、いいよと言つた以上とことん付き合う
べきではないだろうか。それが本当の友情！ そう、友情！ これ
は友情なのだ！！

「わかつたっ！」

「ありがとう、華恋！」

「ぐうっ！」

キラッキラの笑顔の破壊力は本日も半端ない。華恋の頭の中で起
きたビックバンによつて生まれた新しい惑星に、「ユーゴ」と名前
をつけることになりそうだ。

「ねえ華恋、お昼は何が食べたい？」

「うう、……ゆ、祐午は、何がいい？」

「華恋の好きなものでいいよ！ 何が好きだつたっけ？」

こんなやりとりをしているうちに目的地にたどり着き、二人は電
車を降りてアクセルランドの前にたどり着いた。園内に入るよりも
周辺の方がレストランが充実しているので、先にどこかで昼食をと
いうことになる。

「じゃあ、ここにしようか、ビューティ！」

カジュアルな雰囲気洋食系レストランを指差す祐午のセリフに、
華恋は心底ほつとした。

食事が終わって、二人は十代の若者らしい遊園地デートに興じた。
カッチカチだった華恋も少しずつこのシチュエーションに慣れて
きて、うっかり一緒にコーヒーカップをまわしたり、ジェットコー

スターに乗って叫んだり、ゴーカートを操縦してぶつかり合ったりしていく。

彼氏なわけではないイケメンと2人きりのデートというシチュエーションは自分には似つかわしくないイベントだと華恋は思っていたが、相手はよく知った仲である祐午だ。中学を卒業してから、たまに出演する芝居があれば招いてくれていたし、髪を切りに行つて偶然会つた事もある。時には良彦の呼びかけで相変わらず号田が奢りの演劇部OBの集まりだつてあつた。ボケボケの天然ぶりが健在の、朗らかな好青年というキャラクターにかわりがない気持ちのいい相手で、よく考えればそこまで緊張するような間柄でもない。

暗闇の中を、2人で歩く。

お化け屋敷なんてものに、華恋は緊張しない。横から出てきた何かにキヤアツ、なんて可愛い悲鳴をあげることを期待されていたらどうしようかとちょっとだけ悩んだが、それは杞憂に終わった。

「ぐわあああ!!」

古びた井戸から飛び出した死者。それを、祐午は大真面目な顔で見つめている。

「……手の動きとか、もうちょっとこう、何か恨みがあるような雰囲気でつかみかかってやるぞ! って感じの方がいいんじゃないかなあ」

「えっ」

「せっかくここ、血糊がついてるじゃないですか。もっと強調するといいですよ。効果があると思います」

「祐午君! 行こうか!」

設定や演技が甘いお化け役に説教をかます彼氏役の手を取つて、華恋は足早に暗い道を進んでいった。

そんなこんなで日が暮れてきて、お互いの横顔にもう青い影が落ちていく。

「えーと、次はね」

段取りは完全に座長の指示通りにするつもりのようなようだ。ミスコピーの裏のメモをふむふむと確認し、祐午は笑顔を浮かべた。

「ディナーだね！」

「ディナーね」

アクセルランドは海沿いにあるテーマパークで、港もあるこの辺りにはコンサートホールやら大きなショッピングセンター、ついでにいうと立派なホテルもたくさん建っている。

「予約してるんだよ！ 夜景のきれいなお店」

お昼はノープランだったのに？ という疑問が華恋の頭に浮かぶ。が、デートの場合、昼と夜だったら確かに夜の方が気合が入るものかもしれない。

「楽しみだな」

気軽な気分でそう答えたが、連れて行かれた店に華恋はかなり、引いた。

「ここ？」

「うん！」

ここ、フリーターと四角い女子大学生が入っていいわけ？ と思わず入り口で確認したくなるような、ホテルのかなり上の階にあるリッチなムードの店だ。微笑む祐午の袖を引っ張って店の入り口から離れると、華恋はデートにはふさわしくない質問を友人にぶつけた。

「あのさ、ムードぶち壊して申し訳ないんだけど、お支払いとか…
…大丈夫？」

「大丈夫だよ。僕が払うからね」

「いやいやいやいや！ いやいやいや！」

チラリと見えたメニュー表、本日のオススメディナーのコースのお値段は五桁スレスレの四桁だったように見えた。さすがに奢られるには高額すぎる設定に、かなり焦る。財布の中で諭吉先生にスタンプバイしてもらってはいるが、さすがに一食に一人出撃させること

になるとは思いも寄らぬ展開だ。

「いいって。僕のお願いで来てもらったんだから。今日は、華恋は僕の恋人なんだよ」

「ちよっ……、なっ……、……あうっ」

言いたいことが言えないどころか、なんと返したらいいかまったくわからない。華恋の脳内では焦りと照れと恥ずかしさと妙な嬉しさと萌えが入り乱れて戦いを始め、瞬時に全軍が全滅という悲惨な結果に終わった。つまり、結局どう返したらいいのかわからない。

「行こう。さっきも言ったけど、予約してあるんだから。もう時間だよ」

「ここでようやく、華恋は後悔した。」

もっと可愛い格好をしてくればよかったとか。藤田に頼んでバッチリメイクしてもらえばよかったとか。

もちろん自分で顔に改造を施してはいるが、やはりセミプロの腕には遠く及ばない。まさか祐午とデートするからいつちよ頼むとは言えなかったので我流で頑張ったのだが、この美しい夜景の見える店とハイレベルなイケメンと自分はまるで釣り合っていない気がする。

港のあかりが見える窓際の席、薄暗いムーディな照明の下。

……あっているのはせいぜい、背の高さくらいかな、などと考えながら華恋は窓の外に目を向けていた。

そんな華恋を見て、祐午はまた考えた。ドキ(略)キユンだ。僕も、ビューティモ。

「キレイだね」

「え？ うん。そうだね。確かに！」

「華恋がね」

「それはないわ〜！」

真つ赤になつて手をブンブンと振る四角い顔相手に、祐午は意識を集中していく。

彼女は僕の恋人だ。世界で一番大切に、命を懸けてもいい唯一の存在。

そんな人は、今までにいなかった。かけがえのない人。そんな風に思える女性と巡り会ったことがない。そういう相手がいたら、きつと幸せだ。いつだって一緒にいたいし、幸せにしたいし、幸せにしてみたい。

ああ、それが恋か。そんな風に思える相手を得る事。

素敵だ。そんな相手が、僕も欲しい。時にはケンカしても許しあって、嬉しい時には一緒に喜ぶ。

座長の言うとおりだ。そんな人がいたら、僕は無敵になれる。

世界は、もつと輝く。

目の前のイケメンの異常な程の優しい微笑みに気がついて、華恋は慌てて席を立った。

「ちよつと失礼！」

トイレに駆け込み、洗面台に両手をついて下を向いて震える。

なんじゃあれは。武川 祐午おそるべし！ おそるべしったらおそるべし！

これ以上相手をすることは無理だ、という考えが頭をよぎるが、かといってここで勝手に帰るのはやはり気が引ける。お一人様一万円のコースをわざわざ窓際の景色のいい席に予約までして奢ってくれたというのに帰るんかい！ と。ここで帰ったら、肝心の「バーチャル恋人体験」の肝の部分が無しじゃなか、と。

本日の自分に与えられた使命を改めて思い出し、勇気を振り絞っ

て華恋は席に戻った。

大丈夫だ。私はやれる。これは舞台だ。目の前にいるのは、演技に没頭するいつもの祐午君。恋人の「祐午」ではない。何か緊張をほぐす方法がないかと、考えをめぐらせる。そうだ。部長。たとえば今日、部長がこの役目だったとしたら、多分もう8回くらいは死んでる。悩殺されたら死因は脳死？ そんなことはどうでもよくて私はまだ、なんとか生きています。心臓に毛が生えている、凶太い神経の持ち主だから。伊達に顔と合わない分不相応な名前で生きてるわけじゃない。……よし！ いける！

「おまたせ」

「うん」

戻るとすぐに、料理が運ばれてきた。お互い、微笑を浮かべながら和やかに食事を進めていく。

「美味しい！」

「本当だ。こんなの初めて食べたよ」

見た目は王子様で通るのに、感想は庶民丸出しだ。そのおかげで心がやわらかくなり、華恋の緊張は少しずつとけていく。

リラックスしていく華恋の様子に、祐午も安心して食事をすすめる。

最後のデザートが出てきた頃には、二人の間に流れる空気もすっかり穏やかだ。

「良かった」

「何が？」

「だってビューティ、すごく難しい顔してたから。もしかして今日、迷惑だったのかなと思って」

「……あははは……」

和やかな空気になってようやく、祐午の中にはそんな意識が芽生えていた。よく考えてみればただの中学の時の同級生で部活の仲間

だっただけの華恋に、恋人気分を味合わせてくれなんてわけのわからない頼みだったのかもしれない。

それに、よっしーもいるわけだし。

「そんな事ないよ。慣れないシチュエーションだから、緊張したっただけで」

「本当？」

「これが正子だったらそりゃーもう喜んで来てたよね。祐午君にエスコートしてもらえたら、大抵の女の子は喜ぶと思うよ」

「そうかな？ 僕はいつとも気が利かないとか、そんなことばっかり言われるよ」

「ああ……」

この見た目だから、完璧な王子様みたいにしてほしいという願望が生まれてしまうのかもしれない。その気持ちも理解できる。確かにアホだし、何を言い出すんだこいつは、と華恋も思っただけはいたがしかし、そこは責めるところではないだろう。

「祐午君はかつこいいから、みんな期待しちゃうんだろうね。でも、優しいし正直だし、いいところがいっぱいあるんだからそのまんまでいいと思うよ」

地味な顔に微笑を浮かべる友人の言葉に、祐午の心がほっと温まる。

「ありがとう、ビューティ」

「どういたしまして」

名前を言われてもその正体が何なのかわからない「カシスとピスタチオのムース」を食べ終わって、祐午は立ち上がると華恋の手を取った。

「この後は、上のバーで一杯ひっかけるんだよ」

座長さんとやら、何を考えとるんだ、と華恋は呆れる。

「……いやいやいや、未成年でしょ？」

「ああ、そうか。じゃあそれはなしだね」

その様子に、さすが祐午だな、と華恋は思わず感心していた。

「ええと、その次はね」

「次があるの？」

まさかこの後、駅前でラーメンとか？ なんて思っていたら違っていた。

「酔った勢いでそのままホテルに宿泊だつて」

さすがに、華恋はブーっと噴出した。リッチで上品なレストランの入り口でこれはないな、と誰もが思うであろう光景が繰り広げられる。

「それもないよ！ 酔ってないんだから！ 今日は帰ろう、ね！」

「そつか。酔えないんだから、酔った勢いつていうのは無理か」

「そう！ そうそうそうそう！ さあ行こう！」

二人で夜の電車に揺られる。祐午はちよつと残念そうな表情だ。

「座長の計画通りつていうのは無理だったね。僕は18だつてちゃんと言っただけだ」

「まあ、平気で飲んでる人もいっぱいいるけどさ」

その前に、座長がやれと言ったら朝帰りコースに進むんかい！？ と言いたいところだが、純情華恋にそこまでの追求は無理だった。

そこに、天然青年の更なる追撃。

「じゃあ大人になったら行ってみようか」

再び、女子大生はブーっと噴出す。真っ赤になった四角い顔を下に向けて、友人へさすがに苦情を出した。

「祐午君、そこまで天然なのはさすがに罪だと思つよ」

「え？」

華恋からそれ以上の詳細な説明はなく、電車は駅へたどり着く。

最後は紳士らしく女性を家まで送り届け、デートは終了だ。ロッ
カーから取り出した大きな花束を改めて渡す。年齢と同じ数の十九
本の薔薇の重さに、華恋はちよつと複雑な雰囲気的笑顔を浮かべて
いる。

「ビューティ、ありがとう。今日は楽しかったよ」

「……私も、貴重な体験したよ」

次にやる芝居を観にきてもらう約束をして華恋と別れ、祐午は家
への道を歩いた。

今日のデート作戦の成果。

ドキドキはした。恋するってどんなことか、わかった気がする。

ワクワクはした。遊園地は楽しかった。

ウキウキはした。芝居に来てもらう約束もしたし。

ハラハラもした。ビューティがもしかして嫌な気分になってない
か、ちよつと心配だった。

キュンキュンは……。

そもそも、キュンキュンってどんな風だろう？

暗い夜道を一人、祐午は歩く。通りなれた商店街を抜けて、自宅
のあるマンションへ。

そういえば、泊まるっていうのはちよつと迷惑そうだったな。

僕は別に、ビューティとだったら平気だけど。

そんな考えが脳裏に浮かんで、さすがの祐午も問題点に気がつい
た。

ああ、そうか。

それに気がついてもまだ、華恋となら平気だなという結論に至って、武川 祐午は本日、ちょっとだけキュンキュンすることにも成功した。

真夜中のガールズトーク

インターホンがなった。

冬の日の夜、時刻はもう22時を過ぎている。

両親も姉もいない紺野家をこんな時間に平気で訪ねてくる誰か。心当たりは一人しかいない。桐絵は立ち上がって玄関の扉を開いた。「いらっしやい、よう子」

「お邪魔します」

親友を家の中で唯一灯りと暖房をつけている自分の部屋に通し、2人分のコーヒーを用意して椅子に座る。

「どうしたの？ 今日には来ないと思ってたのに」

よう子は本日、彼女のステディである三田村 忠の元へ行くと言っていた。そういう予定の日に自分のところを訪ねてくるなんて今までになかったことだ。

よう子とは小学校2年生の時、7歳の頃から親しく付き合ってきた。お互いに一番の親友だという意識を持っていた。幼かった少女の時代からもう13年も年月が過ぎていて、いつの間にか、人生の三分の二を知っている間柄になっている。

「あのね……」

そのよう子が言いよどむ様子に、桐絵は細い眉をひそめ、下から顔を覗き込むようにして質問をした。

「何かあったの？ 三田村さんと」

よう子が三田村 忠と出会ったのは彼女の兄の友人経由で参加し

たパーティーで、美しくキリリとした容姿の中学生の少女に大学生の男がうつかり一目ぼれしてしまったのが始まりだった。

リッチなボンボンである忠はおっとりとしていて優しく、かつ常識を持ち合わせていたので、即、がっついてくることがない青年だった。よう子にとってこれ以上に都合のいい男はおらず、いいようにたかかってやるうなんていう不純な動機のもと、付き合いが始まったのだ。

そんな親友の言葉を聞いて内心、桐絵は心配で仕方なかった。が、いつの間にか2人の交際はもう7年も続いている。よう子の口から忠に関する文句や苦情が出てくることはなく、当初もくるんでいた「たくさん男を同時進行でいいようにたぶらかす」計画は実行される気配がないままここまで来ていた。

「あつたのよ」

ぐっと、胸のうちを掴まれたような感覚に桐絵は体をこわばらせる。

よう子に付き合い、たとえばイベント毎に三田村家で催されるパーティーに参加したりして、忠とは今までに何回も会っていたし、話す機会があった。少々頼りないところもあるし、たまにアホっぽさを感じることもあったが、よう子を大切にしてくれている彼を今では桐絵も信頼している。

よう子は美しく、逞しい少女だった。しかし、家庭という本来であれば一番の拠り所であるべき場所がなく、その内心はナイーブでとても打たれ弱い。桐絵はそのことをよく知っていて、できれば誰かが責任を持って護ってくれたらと思うていた。自分ではできそうにないその大仕事を、忠に託せたら、とずっと願ってきた。

だから、今のこの目の前にある親友の不安げな表情に、心がどうしようもなく震えてしまう。

よう子は一言発したきり、黙り込んでいる。

熱いコーヒーをちびちびとすすり、伏せられた長いまつげが瞳に浮かぶ感情を見えなくしている。

震える心を必死に抑えて、桐絵はなんとか声を出した。

「よう子、何があったの？ 教えて」

親友の、小さいが真剣な声によう子がようやく顔をあげる。

ひとつ息を吐くと、ぎゅっと閉じていた唇を開いて、こつ返事をした。

「プロポーズされたの」

過去に書き上げた脚本の中に、何度も使っていた、よく知った単語。しかし、親友の口から突然飛び出した場合、その意味合いがわからなくなってしまうという怪現象がこの世にはあるらしい。

「……プロポーズって？」

「もう来月には学校を卒業するでしょう？ そうしたら、結婚してほしいって言われたの」

高校を卒業した後、よう子は服飾の専門学校に通っていた。卒業まではあと少しなのに、その先の身の振り方は決まっていない。オリジナルの服のブランドを立ち上げるのよと言ってはいたが、その裏にはこんな、他の事情が潜んでいたのだろうか。

「どうするの？」

よう子ははあっと息を吐き出し、ふっと微笑むとまっすぐ桐絵を見つめた。

「迷ってる」

そうだろうと、不思議と納得がいく。よう子が単純に喜び、いつものようにくるりとまわって、あっさりとした差し出された指輪を受け取ると思えない。

しかし桐絵としては受け取って、幸せにしてもらえるであろう人の胸に飛び込んでもらいたいという気持ちが強かった。

なにせ、その方がドラマティックだ。

そして、それはきっと、幸せな未来に繋がっている。

「私はいいと思う。三田村さんならよう子のこと、大事にしてくれるでしょう?」

「私もそう思うわ。……付き合い始めた理由は不純なものだったけど、彼はそんなことちつとも気にせず、私の事を受け入れてくれた。そんな人、きつと他にはいないわ。たいした技術があるわけでもないのに口ばかり大きくて、性格だつてとてもいいとはいえない気が取った小娘に真剣に向き合ってくれたし、家族だつて説得してくれた。最初は煙たがっていたお母様も、今ではよくしてくれるもの」

まつすぐ長く伸ばした髪を右手でかきあげ、よう子はふうとまたひとつため息をついて、床に転がっている台本をじつと見つめた。

「これ、今度の舞台の?」

「そんなの、今はいいでしょう?」

「良くないわよ。ユーゴは今度はどんな役をもらえたのかしら?」

その名前を出されるとどうにも弱い。あのカツコイイ後輩にうっかり一目ぼれしてから、もう6年も経っていた。彼以上に美しい男性はいまだに現れることがなく、一方的な好意を胸にしまい続けている、同じ劇団に入るなんてことまでしている。

「準主役よ」

「桐絵は？」

よう子がふふんと笑う。劇団に入ったものの、いきなり入ってきた女子高校生に脚本を書かせるなんて奇跡的な展開があるわけもなく、あれほど人前に出るのが苦手だというのが桐絵も芝居に参加していた。うしろで騒ぐ群衆だったり、たいしたセリフもない役を与えられることがほとんどだったが。

「今回は裏方よ」

「早く脚本が書けるといいわね」

「そんなことより、今はよう子の話でしょ。迷ってるから私のところに来たんじゃないの？」

今まで、何か悩み事があれば2人でこうして部屋で向かい合って話してきた。

答えが出ることも、出ないことも。たとえ解決しなかったとしても、お互いがいつでもそばにいることに安心し、一人ではないと確認しては勇気を持って進んできた。

今日もそうだ。よう子が持ってきた、人生できつと最大の問題をどうすべきか。答えはでなくても、いつものようにわかちあい、少しでも前に進めるよう手を貸したい。

桐絵はそう考えて親友の瞳をじっと見つめた。見つめられたよう子は、いつもより力なく呟く。

「ねえ桐絵。……私、思っていたよりもずっと、サンダーのことが好きだったみたい」

「知らなかったの？ ずっと、好きだったじゃない」

この言葉によう子はがっくりと頭を下げた。そして、笑い始めた。「そうなの。好きだったの。だから今日はすごく嬉しかったし、飛び上がってYESって叫びたかったわ！ だけど、だからこそそれはできなかつた。だって、あんな素敵なお家に私がお嫁に行ったら、

あの意地汚いうちの両親が何をしでかすかわらないわ。それこそ、私なんか目じゃないくらいたかりまくるに決まってる。何の疑問も感じずにお金を無心しにくるに決まっている！」

「よう子……」

「そんなの、耐えられないわ。大切な人だからこそ、そんなことになったら許せない。彼はきつと優しいから、私の両親を受け入れてしまっ」

大きな瞳から涙がこぼれおちて、よう子の着ている自作のスカートに次々としみを作っていく。通り雨が降り出した時の地面のようだとか、大きな瞳だから涙の粒も大きいのだろとか、そんな些細な疑問が頭の裏側を通り過ぎていって、桐絵は頭をブンブンと振った。今はそんなことを考えている場合じゃない。

「よう子、ダメよ。その理論でいったら、よう子は一生結婚なんかできないじゃない。あなたみたいな素敵な子が、ずっと幸せになれないなんておかしいわ。そんなの、間違ってる」

長い付き合いの間で、親友の涙を見たことは何回もあった。それはどれも家族が絡んでいて、解決することがどうしてもできずにいた。

どうしようもない、逃れられない「血縁」という人類にとっても史上最大の難問。しかし。

「私たちはもう大人よ。いつまでも、親の下で世話になっている子供のままじゃない。よう子、もう選択しましょう。三田村さんか、家族か」

「選択……？」

「そうよ。あなたはこの二択を必ずしなくちゃならない。もし今回のプロポーズを断っても、その次もまた必ず選択を迫られるわ。愛

する人をとるのか、諦めて家族とのしがらみに捕らわれたままでいるのか」

かつてない桐絵の迫力に、よう子は思わず背筋をピンと伸ばした。少しの沈黙があり、コーラルピンクの唇がゆっくりと開く。

「でも、うちよりもずっと貧乏な人を選べばこんな選択はしなくていいわよね」

「何言ってるのよ。そんな人を選ぶ気なんかさらさらなくせに」
おかしな返答に少し笑い、しかし桐絵はすぐに真顔に戻ってよう子をまたまっすぐに見つめた。

「いえ、違うわね。三田村さんのような人はもう現れないわ。もし今回の申し出を断ったら、きつとあなたは一生ひとり。いえ、両親の老後の世話に追われて、それが終わるまで見ていた夢は全部叶わない」

「ひどいわね、桐絵」

「そうよ。ひどいわ。今回はそのくらい、まさに人生がかかった選択なのよ」

よう子の白い手を取り、強く、握る。

「あなたはもう充分悩んだ。もういいわよ」

「でも……」

「もしあの両親が来たらって心配なら、あなたが体を張って三田村家を守ればいいじゃない」

ここで桐絵は言葉を止めた。少し、熱くなりすぎている。

ふうつと大きく息をつき、よう子の反応をそっとうかがう。美しい顔は少し視線を横にそらして、どこか遠くを見ていた。

「そうよね。ありがとう、桐絵」

とても悩みが解決したとは思えない沈んだ表情で言われては、お礼の言葉に意味など感じられない。

「でも、私が結婚したら寂しいんじゃない？ これからは一人で夜寝ることになるわよ」

「逆にありがたいわ。うちはホテルじゃないんだから」
たとえば一泊が百円だったとしても、今までの宿泊料金を過去にさかのぼって全額回収できれば欲しかった高価な本だって何冊か買えるはずだ。

そのくらい、よう子はいつもこの部屋で過ごしている。
あんまりしょっちゅうくるおかげで、桐絵の部屋にはいつだって2人分の寝床が用意されていた。自分はベッドで、よう子は床に布団をしいて。

そうやって毎日のように一緒に夜を過ごしてきた。

将来について、夢について、恋について、男の子について、たくさんのお話をした。

私達の、2人の、かけがいのない時間。
だけど、そんな少女達の時間はもう、終わってもいい。

新しい場所へ旅立って幸せになれるのなら、その方がいい。

「今夜も泊まっていくんでしょ？」

「……桐絵がいいなら」

「いいに決まってる」

冷めてしまったコーヒーの入ったカップを置いて立ち上がり、桐絵はよう子専用の布団の準備を始めた。

「化粧を落としてきなさいよ」

「ええ。シャワー借りるわね」

そしてこの夜も、2人で並んで眠った。

朝を迎えると、よう子がなぜか布団の上に正座をして部屋の主の起床を待っていた。

「おはよう」

「おはよう。どうしたの、かしこまっちゃって」

マジメな顔をした友人の前に、桐絵も愛用のめがねを装着して正座をする。

「ねえ、桐絵。結婚してもこんな風に泊まりに来てもいい？」

「……たまにならね」

「寂しくない？」

「寂しくなんかいいわ。昨日も言ったと思うけど」

よう子がふふつと笑う。その笑顔に、問いかける。

「決めたの？ よう子」

「わからないわ。まだ、悩んでる」

わからないと答えたものの、どこか清々しい表情。昨日とは違う、スッキリとした顔だった。

2人で家を出て、駅前のカフェで朝食をとる。

「桐絵、今日の予定は？」

「大学に行つて、その後はバイトよ。帰りは8時過ぎ」

「了解」

よう子は美しい顔に微笑を浮かべると立ち上がり、店の出口へと向かった。

ゆるる長い髪に、周囲でモーニングセットを食べているサラリーマンたちの視線が一気に集まる。

その後姿を見送り、桐絵はカバンからハンカチを取り出すと、なぜか出てきた涙をそっと拭いて、しばらく澄んだ冬の空を見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2370w/>

Project Beauty Plus

2011年10月1日03時15分発行